慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 表紙 目次 |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1967 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.6 (1967. 6) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670601--001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾経済学会

# 三田學會雜誌

1967年　6月号

論　説

M・ウェーバーの方法論における
「主観性」の現代的意義……富田重夫 1
比較経済史学とアメリカ資本主義……中村勝己 12
資源転換の租税政策……古田精司 26
——離陸期における地租の役割——

研究ノート

ヒックス『景気循環論』の一問題点……市石達郎 49
資本形成の一般均衡モデルについて……宮尾尊弘 56

新刊紹介

経済学会報告（昭和41年度）
昭和42年上半期総目次

60巻 6号

昭和二十五年二月二十四日第三種郵便物認可
昭和四十二年五月一日発行毎月一日発行
三田学会雜誌
昭和四十二年五月号
定価一金二〇〇円（送料二円）

# MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 60, No. 5　　May, 1967

CONTENTS

Articles

The Object and Method of Socialist Economics (III)
……*A. Hirano* 1
Analysis of Reproduction Structure
of Japanese Capitalism (II)
——Extended Reproduction Process after 1955 (3)——
……*K. Imura*, *I. Kitahara* 28

Notes

Methods of Regression (supplement) ……*T. Sato* 79
On the Fictitious Capital……*H. Iida* 103

Book Review

The Japanese Capitalism and Labour Problems, 1967,
by M. Sumiya, K. Kobayashi and T. Hyodo ……*K. Iida* 118

Published for
KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI
(The Keio Economic Society)
Editorial Communications to be sent to
the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai,
Keio University,
Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan.
Price 200 yen

## 新刊紹介


松尾　弘著『工業経済の理論と政策』……加　藤　　寛　68

一河秀洋著『財政学ノート』……古　田　精　司　68

小島　清著『世界経済入門
——日本貿易の環境——』……深　海　博　明　69

クリストファ・ターナード
ボリス・プスカレフ共著
鈴木忠義訳編『国土と都市の造形』……高　橋　潤　二　郎　70

J・E・ミード著
北野熊喜男・木下和夫訳『経済学入門
——分析と政策——』……鈴　木　　守　72


# M・ウェーバーの方法論における「主観性」の現代的意義


富田重夫


社会経済学者マックス・ウェーバーの名はすでに広く人口に膾炙しているところであるが、わが国においては大正から昭和の初期にかけてH・リッケルトの文化科学の思想の導入にともなってウェーバー研究が進められてきた。とくに今次の大戦後、マルクシズムの復興に対して、その批判的支柱として、また一方の旗頭の思想的基礎としてウェーバーの名と思想がしばしば引用されてきた。「ウェーバー対マルクス」という魅力的表題のもとに語られるのはこれをもの語るものである。とくに一九六四年はウェーバーの生誕一〇〇年に当る年であり、これを記念して多くのシンポジウムが開かれ、またそれに関連していく多のウェーバー研究に関する出版がなされたことはよく知られたところである。ウェーバー自身の研究が経済史、方法論、さらに社会学の研究ときわめて多方面にわたっているために、彼に関する研究も各方面の専門研究者たちによってそれぞれの領域からなされてきた。ここではとりわけウェーバーの社会科学方法論に議題を限定しようと思うのであるが、この限定された研究領域においても、ウェーバーは数多くの重要な問題提起と学説を説いた。しかしかりにウェーバー方法論の特質を一口で云いあらわすとするならば、私はこれをその「主観性」の強調に求めることができると考えるのである。この主観性の強調とは一つには社会科学的認識におけるそれであり、二つには実践すなわち実践的価値判断におけるそ